

日蓮選

法華止観同異決

当世天台の教法を習学するの輩、多く観心修行を貴んで法華本迹二門を捨つと見えたり。今問ふ、抑観心修行と言ふは天台大師の摩訶止観の説己心中所行法門の一心三観・一念三千の観に依るか、将又世に流布せる達磨の禅観に依るか。若し達磨の禅観に依るといはず、教禅とは未顕眞実・妄語方便の禅観なり。法華經妙禅の時には正直捨方便と捨てらるゝ禅なり。祖師達磨禅とは教外別伝の天魔の禅なり。共に是無得道・妄語の禅なり。仍つて之を用ふべからざるなり。若し天台の止観の一心三観に依るとなれば止観一部の廢立、天台の本意に背くべからざるなり。若し止観修行の観心に依るとなれば、法華經に背くべからず。止観一部は法華經に依つて建立す。一心三観の修行は妙法の不可得なるを感得せんが為なり。故に知んぬ、法華經を捨て、但観を正とするの輩は大謗法・大邪見・天魔の所為なることを。其の故は天台の一心三観とは、法華經に依つて三昧開發するを己心証得の止観と云ふ故なり。

問ふ、天台大師の止観一部並びに一念三千・一心三観・己心証得の妙観は、併ら法華經に依ると云ふ証拠如何。答ふ、予反詰して云はく、法華經に依らずと見えたる証文如何。人之を出だして云はく「此の止観は天台智者の己心中の所行の法門を説くなり」と。或は又「故に止観に至つて正しく観法を明かす、並びに三千を以て指南と為す。乃ち是終窮究竟の極説なり。故に序の中に説己心中所行法門と云へり。良に以有るなり」文。難じて云はく、此の文は全く法華經に依らずと云ふ文に非ず。既に説己心中所行法門と云ふが故なり。天台の所行の法門は法華經なるが故に、此の意は法華經に依ると見えたる証文なり云云。但し他宗に対するの時は問答大綱を存すべきなり。所謂云ふべし、若し天台の止観、法華經に依らずといはず速やかに捨つべきなりと。其の故は天台大師兼ねて約束して云はく「修多羅と合せば録して之を用ひよ。文無く義無きは信受すべからず」云云。伝教大師の秀句下に云はく「仏説に依憑して口伝を信ずること莫れ」云云。竜樹の大論に云はく「修多羅に依るは白論なり修多羅に依らざるは黒論なり」云云。教主釈尊云はく「法に依つて人に依らざれ」文。天台は法華經に依り竜樹を高祖ともし乍ら經文に違し、我が言を翻じて外道邪見の法に依つて止観一部を釈する事全く有るべからざるなり。問ふ、正しく止観は法華經に依ると見えたる文之有りや。答ふ、余りに多きが故に少々之を出ださん。止観に云はく「漸と不定とは置いて論ぜず。今經に依つて更に円頓を明かさん」云云。弘決に云はく「法華經の旨を攢めて不思議・十乘・十境・待絶滅絶・寂照の行を成ず」文。止観大意に云はく「今家の教門は竜樹を以て始祖と為す。慧文は但内観を列ぬるのみ。南岳天台に泊んで復法華三昧に困つて

陀羅尼を發し、義門を開拓するに觀法周備す。若し法華を積するには彌須權實本迹を
曉了して方に行を立つべし。此の經独り妙と稱することを得。方に此に依って以て觀道
を立つべし。五方便及び十乘軌行と言ふは即ち円頓止觀は全く法華に依る。円頓止觀
は即ち法華三昧の異名なるのみ」云云。文句の記に云はく「觀と經と合すれば他の宝を
数ふるに非ず。方に知んぬ、止觀一部は是法華三昧の筌蹄なり。若し斯の意を得れば方
に經旨に會ふ」云云。唐土の人師行滿の積せる学天台宗法門大意に云はく「摩訶止觀一
部の大意は法華三昧の異名を出でず。經に依って觀を修す」云云。此等の文証分明なり、
誰か之を論ぜん。問ふ、天台四種の積を作るの時、觀心の積に至って本迹の積を捨つと
見えたり。又法華經は漸機^{ぜんき}の為に之を説き、止觀は直達の機^{いかん}の為に之を説くと如何。答
ふ、漸機^{ぜんき}の為に説くは劣り頓機^{とんき}の為に説くは勝るとならば、今の天台宗の意は華嚴・真
言等の經は法華經に勝れたりと云ふべきや。今の天台宗の浅猿^{あさまし}さは真言^{じりくみつ}は事理俱密の教
なる故に法華經に勝れたりと謂へり。故に止觀は法華に勝ると云へるも道理なり道理な
り。

次に觀心の積の時本迹^{ほんじやく}を捨つと云ふ難は、法華經何れの文にか人師の積を本と為し
て仏教を捨てよと見えたるや。設ひ天台の積なりとも積尊の金言に背き法華經に背かば
全く之を用ふべからず。依法不依人の故に、竜樹・天台・伝教元よりの御約束なるが故
なり。其の上天台の積の意は、迹の大教起れば爾前の大教亡じ、本の大教興れば迹
の大教亡じ、觀心の積の大教興れば本の大教亡じと積するは、本体の本法をば妙法不思議の
一法に取り定めての上^{かんじん}に修行を立つるの時、今像法の修行は觀心の修行を詮と為す。迹
を尋ぬれば迹^{たず}広し、本を尋ぬれば本高ふして極むべからず。故に末学機^{かな}に叶ひ難し。但
己心の妙法を觀ぜよと云ふ積なり。然りと雖も妙法を捨てよとは全く積せざるなり。
若し妙法を捨てば何物を己心として觀ずべきや。如意宝珠を捨て貧窮を取って宝と為す
べきか。悲しいかな、当世天台宗の学者は念仏・真言・禅宗等に同意するが故に、天台
の教釈を習ひ失って法華經に背き大謗法の罪を得るなり。若し止觀を法華經に勝ると云
はゞ種々の過之^{とが}有り。止觀は天台の道場所得の己証^{こしょう}なり。法華經は積尊の道場所得の
大法なり^是。積尊は妙覺果滿の仏なり。天台は住前未証^{じゅうぜん みしょう}なれば名字・觀行・相似に
は過ぐべからず。四十二重^{じゅう}の劣なり^是。法華經は積尊乃至諸仏出世の本懐^{ほんがい}なり。止觀は
天台出世の己証^是なり^是。法華經は多宝の証明あり。來集の分身は広長舌を大梵天に付く
皆是真實の大白法^{だいびやくほう}なり。止觀は天台の説法なり^是。是くの如き等の種々の相違之有れど
も仍之を略するなり。又一つの問答に云はく、所被^{しよひ}の機、上機なる故に之を勝ると云は
ゞ實^{じつ}を捨て、權^{ごん}を取れ。天台云はく「教彌權なれば位彌高し」と積し給ふ故なり。所
被^{ひく}の機下劣なる故に劣ると云はゞ權^{いよいよごん}を捨て、實^{いよいよごん}を取れ。天台の積には「教彌實なれば位
彌下し」と云ふ故なり。然るに止觀は上機の為に之を説き、法華は下機の為に之を説く
と云はゞ、止觀は法華に劣れる故に機を高く説くと聞こえたり。実にさも有るらむ。天

台大師は靈山の聽衆、如来出世の本懷を宣べたまふと雖も、時至らざるが故に妙法の名字を替へて止観と号す。迹化の衆なるが故に本化の付嘱を弘め給はず。正直の妙法を止観と説きまぎらかす。故に有りのまゝの妙法ならざれば帶權の法に似たり。故に知んぬ、天台弘通の所化の機は在世帶權の円機の如し。本化弘通の所化の機は法華本門の直機なり。止観・法華は全く体同じと云はん。尚人師の積を以て伝説に同ずる失甚重なり。何に況んや止観は法華經に勝ると云ふ邪義を申し出だすは、但是本化の弘經と迹化の弘通と、像法と末法と、迹門の付嘱と本門の付嘱とを末法の行者に云ひ顯はせんが為の仏天の御計らひなり。爰に知んぬ、当世の天台宗の中に此の義を云ふ人は祖師天台の為には不知恩の人なり。豈其の過を免れんや。夫天台大師は昔靈山に在っては薬王と名づけ、今漢土に在っては天台と名づけ、日本国の中にては伝教と名づく。三世の弘通俱に妙法と名づく。是くの如く法華經を弘通し給ふ人は在世の釈尊より外は三国に其の名を聞かず。有り難く御坐します大師を、其の末学其の教積を悪しく習ひて失無き天台に失を懸けまつる、豈大罪に非ずや。

今問ふ、天台の本意は何なる法ぞや。碩学等の云はく、一心三觀是なり。今云はく、一実円満の一心三觀とは誠に甚深なるに似たれども尚是行者修行の方法なり。三觀とは因の義なるが故なり。慈覚大師の積に云はく「三觀とは法體を得せしめんが為の修觀なり」云云。伝教大師云はく「今止観修行とは法華の妙果を成ぜんが為なり」云云。故に知んぬ、一心三觀とは果地・果徳の法門を成ぜんが為の能觀の心なることを。何に況んや三觀とは言説に出でたる法なる故に、如来の果地・果徳の妙法に対すれば可思議の三觀なり。

問ふ、一心三觀に勝れたる法とは何なる法ぞや。答ふ、此の事誠に一大事の法門なり。唯仏与仏の境界なるが故に、我等が言説に出だすべからざるが故に是を申すべからざるなり。是を以て經文には「我が法は妙にして思ひ難し言を以て宣ふべからず」云云。妙覚果満の仏すら尚不可説・不思議の法と説き給ふ。何に況んや等覺の菩薩已下乃至凡夫をや。問ふ、名字を聞かざれば何を以て勝法有りと知ることを得んや。答ふ、天台己証の法とは是なり。当世の学者は血脈相承を習ひ失ふ故に之を知らず。相構へ相構へて秘すべく秘すべき法門なり。然りと雖も汝の志神妙なれば其の名を出だすなり。一言の法是なり。伝教大師の「一心三觀一言に伝ふ」と書き給ふ是なり。問ふ、未だ其の法體を聞かず如何。答ふ、所詮一言とは妙法是なり。問ふ、何を以て知ることを得ん、妙法は一心三觀に勝れたりと云ふ事を。答ふ、妙法は所詮の功德なり。三觀は行者の觀門なるが故なり。此の妙法を伝説いて言はく「道場所得法、我法妙難思、是法非思量、不可以言宣」云云。天台云はく「妙とは不可思議・言語道断・心行所滅なり。法とは十界十如・因果不二の法なり」と。三諦と云ふも三觀と云ふも三千と云ふも不思議法と云ふも、天台の己証は天台の御思慮の及ぶ所の法門なり。此の妙法は諸仏の師なり。今の經文の如くならば、久遠実成の妙覺極果の仏の境界にして爾前迹門の教主・諸仏・菩

薩の境界に非ず。經に「唯仏ないのうくじん与ん、乃能究ん」とは、迹門の界如三千の法門をば迹門の
仏が当分くきょう究竟の辺を説けるなり。本地難思ほんちなんしの境智きょうちの妙法は迹仏等の思慮に及ばず、何
に況んや菩薩・凡夫をや。止觀の二字をば「觀名かんみょうぶつち仏知、止名しみょうぶつけん仏見」と釈するも、迹門
の仏智・仏見にして妙覺極果の知見には非ざるなり。其の故は止觀は天台己証の界如三
千・三諦三觀を正なと為す、迹門の正意是なり。故に知んぬ、迹仏の知見なりと云ふ事を。
但止觀に絶待不思議の妙觀を明かすと雖も、只一念三千の妙觀しばらに且く与へて絶待不思議
と名づくるなり。

問ふ、天台大師真実しかに此の一言の妙法を証得したまはざるや。答ふ、内証しかは爾なり。
外用げゆうに於ては之を弘通いわゆるしたまはざるなり。所謂内証の辺をば秘して、外用には三觀と号
して一念三千の法門を示現し給ふなり。問ふ、何が故ぞ知りなが乍ら弘通し給はざるや。答
ふ、時至らざるが故に、付囑に非ざるが故に、迹化なるが故なり。問ふ、天台此の一言
の妙法これ之を証得し給へる証拠之有りや。答ふ、此の事天台一家の秘事なり。世に流布せ
る学者之を知らず。灌頂かんじょうげんし玄旨の血脈とて天台大師自筆の血脈一紙之有り。天台御入滅
の後は石塔の中に之有り。伝教大師御入唐の時八舌かぎの鑰を以て之を開き、道邃どうずい和尚より
伝受し給ふ血脈とは是なり。此の書に云はく「一言の妙旨、一教の玄義」文。伝教大師
の註血脈に云はく「夫一言の妙法とは、両眼を開いて五塵ごじんの境を見る時は隨縁真如なる
べし。五眼を閉じて無念に住する時は当まさに不變真如なるべし。故に此の一言を聞くに万
法茲に達し、一代の修多羅一言に含す」文。此の兩大師の血脈の如くんば天台大師の血
脈相承の最要の法は妙法の一言なり。一心三觀とは所詮妙法を成就せんが為の修行の方
便なり。三觀は因の義、妙法は果の義なり。但因の処に果有り、果の処に因有り、因果俱時
の妙法を觀ずるが故に是くの如き功能を得るなり。爰に知んぬ、天台至極の法門は法華
本迹未分の処に無念の止觀を立て、最秘の上法とすと云へる邪義大いなる僻見びやっけんなりと
云ふ事を。四依弘經の大薩埵しえぐきょう だいざつたは既に仏經に依って諸論を造る。天台何ぞ仏説に背いて
無念の止觀を立てんや。若し此の止觀は法華經に依らずといはゞ天台の止觀は教外別伝きょうげべつでん
の達磨の天魔の邪法すべに同ぜん。都て然るべからず。哀れなり哀れなり。

伝教大師云はく「国主の制に非ざれば以て遵行じゆんぎょうすること無く、法王の教に非ざれば
以て信受すること無し」文。又云はく「四依、論を造るに権有り実有り。三乗の旨を述
ぶるに三有り一有り。所以に天台智者は三乗の旨に順じて四教の階を定め、一実の道に
依って一仏乗を建つ。六度に別有り、戒度何ぞ同じからん、受法同じからず、威儀いぎあに豈同
じからんや。是の故に天台の伝法は深く四依に依り亦仏經に順したがふ」文。本朝の天台宗
の法門は伝教大師より之を始む。若し天台の止觀、法華經に依らずといはゞ日本に於て
は伝教の高祖に背き、漢土に於ては天台に背く。兩大師の伝法既に法華經に依る。豈其
の末学之に違せんや。違するを以て知んぬ、当世の天台家の人々、其の名を天台山に借
ると雖も所学の法門は達磨の僻見ぜんむいと善無畏の妄語もうごとに依ると云ふ事を。天台・伝教の解
釈しゃくの如くんば己心中の秘法は但妙法の一言に限るなり。然るに当世の天台宗の学者は

天台の石塔の血脈を秘し失ふ故に、天台の血脈相承の秘法を習ひ失ひて、我と一心三觀の血脈とて我が意に任せて書を造り、錦の袋に入れて頸に懸け、箱の底に埋めて高直に売る故に、邪義国中に流布して天台の仏法破失せるなり。天台の本意を失ひ、釈尊の妙法を下す。是偏に達磨の教訓、善無畏の勧めなり。故に止觀をも知らず、一心三觀・一心三諦をも知らず、一念三千の觀をも知らず、本迹二門をも知らず、相待・絶待の二妙をも知らず、法華の妙觀をも知らず、教相をも知らず、権実をも知らず、四教・八教をも知らず、五時・五味の施化をも知らず、教・機・時・国・相應の義は申すに及ばず、実教にも似ず、権教にも似ざるなり。道理なり道理なり。天台・伝教の所伝は禅・真言より劣れりと習ふ故に、達磨の邪義、真言の妄語に打ち成りて権教にも似ず、実教にも似ず、二途に撰せざるなり。故に大謗法罪顯はれて止觀は法華經に勝ると云ふ邪義を申し出だして、失無き天台に失を懸けたてまつる。故に高祖に背く不孝の者、法華經に背く大謗法罪の者と成るなり。

夫天台の觀法を尋ぬれば大蘇道場に於て三昧開發せしより已來、目を開いて妙法を思へば隨縁真如なり、目を閉じて妙法を思へば不變真如なり。此の兩種の真如は只一言の妙法に有り。我妙法を唱ふる時万法茲に達し、一代の修多羅一言に含す。所詮迹門を尋ぬれば迹広く、本門を尋ぬれば本高し。如じ己心の妙法を觀ぜんにはと思し食されしなり。当世の学者此の意を得ざるが故に、天台己証の妙法を習ひ失ひて、止觀は法華經に勝り禅宗は止觀に勝れたりと思ひて、法華經を捨て、止觀に付き、止觀を捨て、禅宗に付くなり。禅宗の一門の云はく「松に藤懸かる、松枯れ藤枯れて後如何。上らずして一打」など云へるは天魔の語を深く信ずる故なり。修多羅の教主は松の如く其の教法は藤の如し。各々に諍論すと雖も仏も入滅し教法の威徳も無し。爰に知んぬ、修多羅の仏教は月を指す指なり、禅の一法のみ独り妙なり。之を觀ずれば見性得達するなりと云ふ大謗法の天魔の所為を信ずる故なり。然るに法華經の仏は寿命無量、常住不滅の仏なり。禅宗は滅度の仏と見るが故に外道の無の見なり。是法住法位世間相常住の金言に背く僻見なり。禅宗は禅は法華經の方便、無得道の禅なるを眞実常住の法と云ふが故に外道の常見なり。若し与へて之を言はゞ仏の方便三蔵の分齊なり。若し奪つて之を言はゞ但外道の邪法なり。与は当分の義、奪は法華の義なり。法華の奪の義を以ての故に禅は天魔外道の法と云ふなり。問ふ、禅を天魔の法と云ふ証拠如何。答ふ、前々に申すが如し。

立 正 觀 抄